

共に実践の質感をたどる対話の可能性を探る 『保育を綴る—対話型マップ記録の提案』を手掛かりに

○企画・進行 高橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 指定討論者 古賀松香（京都教育大学）
話題提供者 谷地理沙・佐々木麻美（お茶の水女子大学附属幼稚園）ダーリンブル規子（桜花学園大学）

1. 企画趣旨

本園では、2019 年より、その日の保育記録を学年で 1 枚の A4 用紙に、学年担当教師 3～4 名で順次書いている。用紙の中央に簡単な園のマップがあることでその日のことを想起しやすく、子どもの姿や遊び、教師の思い等何を書いてもよい。時に前の教師が書いたことに重ねたり応答したりすることもあるため「対話型マップ記録」と呼んでいる。

この記録が生まれた経緯としては、本園は子どもがしたいことをしたい場所でする暮らしをしているため、学年の教師同士での伝え合い

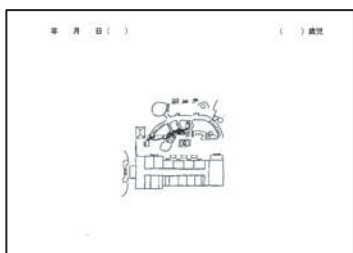


図1 対話型マップ記録用紙

は重要であるが、十分に話す時間が取れない状況があった。また、会話だけでは話した内容を後から思い出せないため、記録の必要性を感じ、様々な記録方法を試みたが、長続きしなかった。そこで、先行研究を参考にし、時系列やその日の出来事を網羅して書く記録ではなく、対話の変遷が見えるような記録を書きたいと考え、この「対話型マップ記録」用紙を発案した。

この記録の特徴としては、それぞれの仕事のタイミングで書ける教師から、その日の出来事を通じて感じたこと、気になったこと、伝えたいこと、悩みなども自由に書き記す。次の教師は、前に書かれたことに触発され、コメントを書き足すこともある。ペンが進まないときには書かなくてもよいことが保障され、提出はせずに、職員室に置いておくようにしている。そして、7年間継続してきたことで、次のような効果を感じている。①学年の教師で書くことで、自ずと子どもたちの遊びや思いのプロセスが見えてくる②子ども同士の関係性に目を向けられ、一人一人の育ち、周りとの関係性を捉えていくことにつながる③他の教師の思いや関わりを知ることができ、翌日の保育につながるなどが、挙げられる。

では、どうして私たちはこの記録を意味あるものと捉え、書き続けているのだろうか。それは、その日1日実践した保育の「質感」をのせていける記録だと感じているからである。保育は子どもとの身体的・感覚的な関わりであり、関わりながら子どもの行為の意味を感じとり、そのとき残った身体感覚を思い起こしながら考え続け、さらに、ささいな変化を捉え、子どもを理解しようとする。保育記録は、そうした教師の実践行為の感覚と、なるべく

離れてはいけないのではないだろうか。もちろん保育という時間的空間的な要素のある立体的なものの、さらに様々な関係性があるものの一部を切り取り、言葉で紙面に表すという行為自体、困難なものではある。しかし、実際に近づけ、次なる子ども理解、保育実践につながるものとしてあるべき保育記録には、実践の「質感」を損なわずに表そうとすることが大切ではないかと考えた。さらに、その保育の「質感」を他の教師と共にたどる対話のなかでこそ、子ども理解の深まり、そして、実践者としての育ち合いがうまれるのではないかと感じている。今回、実践者と研究者双方で記録を通した対話の可能性について議論すべく、このようなテーマを設定した。

2. 話題提供

(1)ある日の「対話型マップ記録」

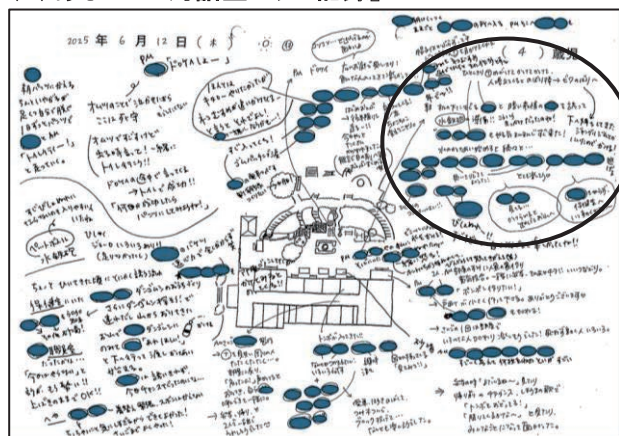


図2 記録(4歳児6月12日)

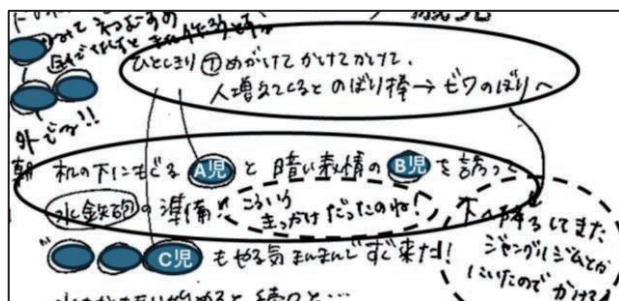


図3 記録上の対話(抜粋)

年中の1学期は、進級によって2クラスの子どもが混ざり、また他の園から転入して来る子どももいて、それぞれに気持ちの揺れを抱えながら始まった。6月のこの記録の頃は、友達への興味も強まり、関わり合いが楽しい一方で、上手い出来ないことに戸惑う様子も増えていた。A児とC児は年少時に隣のクラスだった進級児で、

教師に甘えたい気持ちが伝わってくるが、新しく担任になった私にまだ遠慮する様子があり、B児(年少時同じクラス)は、友達に関わろうとするものの、気持ちのすれ違いから表情が曇ることも多く、気になっていた。関わるきっかけを日々探る中で、前日、隣のクラスの担任と一緒に水鉄砲を準備しながら、これはきっと好きそうだな、この人たちと一緒に始めたいなと思っていた。この日予想よりも気温は上がらなかったが、朝の子どもの様子を見て今だと感じ、必死の思いで水鉄砲を始めた。他にも色々な子どもが関わってきて、「この人が動き出した」「この人がいつになく楽しそう!」「あの人もしっと見ているから巻き込みたいな」と一人一人に思いをかけながら夢中で水をかけ合った。保育後、まとまらない思いをそのまま記録に書いた。その後書き加えてくれたコメントを見ると、私の記録からその時の思いを感じ取ってくれたことが伝わってきて、また、A児とC児に、私が関わった後で同じように働きかけてくれていたことを知った。

「対話型マップ記録」は、同じ学年の教師という宛先があるから継続しやすいが、分かりやすくきれいに書こうと意識しているわけではない。けれど、短い呟きや文の勢い、時に長く書かれる一人への思いから、同じ場にはいなかったとしても、その時の状況や書き手の気持ちが伝わってくるように感じる。(谷地理沙)

(2)「対話型マップ記録」とおして対話してきて

保育後にこの記録を書き始めようとすると、様々な出来事が思い浮かんでくる。「今日もいろいろなことがあったな」「なんでこう関わってしまったのか…」、前に書いてある教師の言葉を読み、子どもたちの姿がつながることもある。

前述の記録について、隣のクラスの担任である私は、保育室で製作に関わっていた。園庭で水鉄砲が始まったことに気づき、朝、今日は少し肌寒いかと担任間で話していたが、やる流れになったのだなと思い、遅れて参加。水鉄砲が足りず、他の道具を駆使しながらやりたい子どもたちの気持ちを支えつつ、応戦していた。ふと気づくと、隣の担任が関わりに悩んでいた2人が、濡れつつ離れたところから様子を見ていたので、関わってみたところ、再び遊び出したことを書き足した。気にかけていた2人のその後の様子を伝えたく、みんなの中では少し気後れするが、この遊びは好きかもしれないということがわかったり、教師の支えがあれば動き出せるなら、教師間で支えていきたいという気持ちからだった。

このように、ありのままを書ける記録で対話することは、私にとってどのような意味があるのだろうか。保育をしたあとは、整理して考えられるほど頭も心も整っているものではなく、ものすごくごちゃごちゃと、いろいろな気持ちが渦巻いている。そして、保育自体も、子どもたち一人一人の思いやもの・人・こととの関わりが、網の目のように広がっていて、すっきりと書き表すことはできない。この水鉄砲の遊び1つとっても、様々な子どもの姿と自分の関わり、そして感じたことがある。自分のなかに残

っているのは、身体的・感覚的などころが大きく、そうして感じた子どもへの見取りは、まだ「～かもしれない」というような曖昧なことが多い気がする。しかし、曖昧なことを曖昧なまま自分の中に残して、また次の日関わり、考え続けることに、大切なことがあるように思う。そのために、記録を書く時の思考のなかで、曖昧なことをそぎ落とさずにいられるこの記録を書き、読んでもらうことは、思いを持ち続けながら、次の保育実践へ向かう自分を支えてくれるものとなっている。また、他の教師が書いた記録に表されている言葉から、それぞれの教師の子どもとの時間が感じとれ、関わった事実からも、行間にある思いも伝わってくる。教師間で思いを交わすことで、より実践が深まっていくと感じている。(佐々木麻美)

(3)日本語の雰囲気伝える英語にしていこうプロセス

『保育を綴る一対話型マップ記録の提案』を日本語と英語の両方をつけて出版するというので、英国人のMarkと日本人で保育研究を専門としている筆者とで、その英語訳の校閲を担当することとなった。幼稚園の教師らが、自分の保育や子どもの様子をその体験の感覚について考えながら日本語で表現する。それをさらに自分たちで英語にし、それが私たちの手元に届く。日本語で表している雰囲気が英語にも感じられるのか、その英語表現を英語を読んだ人たちにその雰囲気まで伝えることができるものにどうしたらなるのか、その部分を大切にMarkと話し合い、教師とやりとりをした。そのプロセスは、教師や子どもの行為、幼稚園でのその場の雰囲気を言葉にしていこう行為と重なり、さらに、「対話型マップ記録」で教師同士がやりとりをしている行為と重なっているように思える経験であった。

例えば、教師の記録に「(D児の話を)聞いてあげると、涙を流す」とあった。この「聞く」をどの言葉で表現するといいいのか。なぜ悪いことをしたのか、という感じで聞くのか、実際にはどんな状況で聞いているのか、とMarkと2人で話し合い、幼稚園側に投げかける。すると、「あ、このころ、D児の余裕のなさが気になっていたが、他の子が遊びだした瞬間を逃さないと思っていて、そちらに関わっていた。そんなときに、他の教師にD児のことを聞いて、改めて私も話を聞いてあげたいと思った」と教師から返事が来た。この教師の思いから、英語表現も見えてきた。あるいは、逆に「子どもの行為ややりとり」の英語表現に、少しずれを感じた教師から、『『子どもの行為』』というのは、単純に言えば『していること』そこには、動きも言葉も、目や体で表出している気持ちも含まれるかと思う。『やりとり』というのは、『(人との)関わり合い』であり、そこにも、言葉でのやりとり、真似し合う、ついていくなどノンバーバルなやりとりも入ってくると考えている。」とコメントをもらい、教師らが伝えようとしている意味合いを改めて考え、英語表現を見出していくこともあった。

「いま、ここ」を時間差があるのにもかかわらず、共有しているようでもある私たちにとっても、幼稚園の保育についての「対話」の時間となった。(Dalrymple 規子)